

震災後のよそおいを媒介とする心理支援活動の検討

木戸彩恵¹・サトウタツヤ²

(¹ 立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究センター・² 立命館大学文学研究科)

問題と目的

よそおいの価値は、非常に揺らぎやすい。平時には個人が属する社会・文化的文脈の要請に従って実践される習慣的な行為であるにも関わらず、よそおいを文化と捉える視点は未だ欠如している。また、メイク・セラピーなどのよそおいを媒介とした心理支援も、本邦においてはボランティアがケアの役割を担っており、専門性をもつ臨床的ケアとして位置づけられていないこともあり、その役割が必ずしも明確になっていない（木戸，2012）。震災後の心理支援活動に限って言えば、東日本大震災発生後には、速やかに大手企業から支援物資として被災地に化粧品や下着が届けられた。物資が届けられる一方で、よそおいを媒介とする心理支援活動は、女性的な観点と心理ケアへの配慮が十分に考慮されてこなかったというこれまでの震災支援の背景からその重要性が認められにくく、自治体との交渉の中で支援活動をすぐに開始できない、ボランティア団体が支援としての位置づけをうまくできないというケースもあったようである。

これに対して、近年では身体性を伴う被災状況下でのケアが支援活動の中で拡がりを見せている。間主観性の感覚を生み出すために何らかの媒介が用いられる場合、ケアの成否は支援者による媒介の“介在のさせ方”によって決定するという（衣斐，2012）。例えば、足湯によるケアは、身体接触によって、被災者との一体感を生み出し、新しい関係を紡ぎだすように、復興において、被災者に限りなく近く、皮膚感覚を刺激するほど傍にすることで、一体感と新しい関係を紡ぎだすことができるとされる（矢守・渥美・近藤・宮本，2012）。よそおいを媒介とする心理支援活動も同様の効果が期待できる。具体的には、個人のパーソナルな領域への身体接触、よそおう過程において繰り広げられる対話による新たな関係性の創出が期待できるだろう。

そのため、本研究では、東日本大震災発生後のよそおいを媒介とした組織的な心理支援活動について概要をまとめるとともに、実際の支援に携わった方々にご協力を依頼し、インタビュー調査を実施する。本研究にご協力くださる方々は、支援者であると同時に被災者でもある。こうした背景をもつ方々が、よそおいを媒介とする心理支援活動を通していかなる体験をしたか、活動から何を得ることができ、何を供給することが出来たのか、そこで生成された新たな関係性はこういったものだったのかということを明らかにする。なお、インタビュー・データは活動理論（Engestrom, 2001）を用いて分析し、支援活動の実態の把握のみではなく、支援者と被支援者双方の拡張的学習、特に支援者にとっての学びについて検討する。

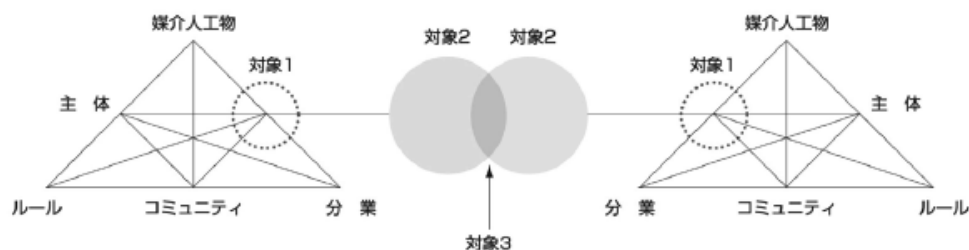


Fig.1 第三世代活動理論のための最小限二つの相互作用する活動システム
(Engestrom, 2001)

研究協力者

よそおいを媒介とした心理支援活動イベントにスタッフとして参加された専門学校の講師・学生

研究方法

個別のインタビューもしくは小集団でのグループ・フォーカスト・インタビュー調査を実施する。グループ・フォーカスト・インタビューでは、各々の経験を共有することにより、個別のインタビューでは得られなかった新たな観点が浮上することなどが副次的に期待される。